

方言用法の「来る」について

— 英語の come/go と日本語の「来る」 / 「行く」の考察を通して — *

松尾秀樹**

A Comparative Study of 'Come' 'Go' 'Kuru' 'Iku' and the Dialectal Usage of 'Kuru'

Hideki MATSUO

1. はじめに

英語および日本語における移動を表す動詞のうち、英語の come と go、日本語の「来る」と「行く」という動詞を考えた場合、例えば、“Billy, supper’s ready.”（「ビリー、夕食ができたわよ」）という呼びかけに対して、“I’m coming, Mom.”（「今行くよ、母さん」）（『E ゲイト英和辞典』より）と、英語では “I’m coming.” を使うのに対し、日本語では「行く」を使う。come は「来る」、go は「行く」という単純な意味対応では説明できないケースがあり、これらの動詞の基本的用法の背景にあるメカニズムに関して長年多くの研究がなされてきている。

一方、標準的な日本語では、「そっちに行くね」と言うが、九州の方言では、「そっちに来るね」と言う意味の方言が各地で使われていて、佐世保が含まれる方言分類上の肥筑方言でも、「そっちに来るけん」という表現が使われることがある。これは、英語の “I’m coming.” と何か類似点があるようにも思える。

本論では、まず、come と go、「来る」と「行く」についての先行研究を概観し、“I’m coming.” と方言用法の「来るけん」を比較検討する場合の論点を整理する。次に、方言用法の「来るけん」に関する先行研究を概観しまとめを行う。その後、「来る」の方言用法に関して佐世保高専の学生に実施したアンケートの結果や聞き取り調査の結果をまとめ、実態や傾向などについて考察を行う。そして、“I’m coming.” と「来るけん」という表現の背景にあるメカニズムに関して類似点と相違点について考察を行う。最後に今後の展開について述べてまとめとする。

2. come と go、「来る」と「行く」について

come は話し手に近づく移動、go は話し手から遠ざかる移動を表すと一般的に考えられている。同じように、「来る」と「行く」も移動を表し、「来る」は話し手に近づく移動を表し、「行く」は話し手から遠ざかる移動を表すと一般的に考えられている。しかし、come は「来る」、go は「行く」という単純な意味対応では説明できないケースがあることもよく知られている。

これまで、come と go、「来る」と「行く」に関して、多くの議論がなされてきているが、まず、代表的な研究における come と go、「来る」と「行く」に関する議論を概観してみたい。

2. 1 come と go、「来る」と「行く」に関する理論

come と go、「来る」と「行く」について議論がなされる場合、deixis という概念が使われることが多い。deixis は、「ダイクシス」や「直示」と訳される。Levinson（1983）は、deixis に関して、“The traditional categories of deixis are person, place and time”（p.62）と述べているが、「誰が」「誰に」「いつ」「どこで」などは、come と go、「来る」と「行く」という動詞の用法や選択に深く関わっていると考えられる。

come と go に関する議論で、多くの研究者が考察の基盤にしているのは Fillmore（1972）の理論である。まずは、その Fillmore が述べる come と go の基本的な定義を確認してみたい。

Fillmore（1972）は、go と come について、以下のように基本用法を説明している（p.6）（大文字は

* 原稿受付 令和3年10月5日

** 佐世保工業高等専門学校 基幹教育科

原文のまま)。go と come の定義の中に、「誰が」「いつ」「どこで」と deixis の視点が含まれている。

(A) For Go, it is assumed that the Sender is not located at the Goal at the coding time.

(B) For Come, it is assumed

(i) that the Sender is at the Goal at the coding time;

(ii) that the Sender is at the Goal at arrival time;

(iii) that the Addressee is at the Goal at coding time;

(iv) that the Addressee is at the Goal at arrival time.

the coding time は「発話時」、the Sender は「話し手」、the Addressee は「聞き手」、the Goal は「到達時」と訳すことができる。

次に、大江 (1975) は、Fillmore の上記の論点を基に、come と go の基本的用法について以下のように述べている (p.14)。

a. go の場合、伝達時にも到達時にも話し手が到達点に位置していないと考えられている。

b. come の場合、次のことが考えられている。

(i) 伝達時に話し手が到達点にいる。

(ii) 到着時に話し手が到達点にいる。

(iii) 伝達時に聞き手が到達点にいる。

(iv) 到着時に聞き手が到達点にいる。

大江は、come に関しては、b の(i)から(iv)の条件すべてが満たされてもよいし、どれかひとつだけ満たされもよい、と述べている。Fillmore の定義との違いは、go に関して大江が「伝達時」という視点を取り入れている点であるが、それ以外は Fillmore と大江の come と go の基本用法の見解はほぼ一致している。なお、大江が使っている「伝達時」という用語については、「発話時」という用語が使われることが多い。

大江は、また、「行く」の条件は go の条件をそのまま変えれば「行く」の使用となり、「来る」の条件は上記の(i) (ii)だけで(iii) (iv)はあてはまらない、としている。

すなわち、大江の come と go の条件を、「来る」と「行く」に当てはめると、次のようになる。

a. 「行く」の場合、伝達時にも到達時にも話し手が到達点に位置していないと考えられてい

る。

b. 「来る」の場合、

(i) 伝達時に話し手が到達点にいる。

(ii) 到着時に話し手が到達点にいる。

さらに、久野 (1978) は、「来る」「行く」の基本的用法に関して、「話し手」が「動く主体である」か「動く主体でないか」によって次のように分けて定義している (pp.253-254) (原文では「来ル」「行く」となっているが、「来る」「行く」に変更している。「E」は“Empathy”「共感度」を示す。「 \geq 」は原文のままである)。

a. 話し手が動く主体である場合

発話場所が到達点であれば「来る」、出発点であれば「行く」が用いられる。

b. 話し手が動く主体でない場合

「来る」 発話の時点、或いは動きの動作の起きる(起きた)時点に到達点にいる(いた)(動きの主体以外の)人に話し手の視点が接近している時用いられる。

E (到達点側の人) $>$ E (動きの主体、出発点側の人)

「行く」 その他の場合に用いられる

E (動きの主体、出発点側の人) \geq E (到達点側の人)

久野の定義で特に着目しておきたいのは、「話し手が動く主体である場合」と「話し手が動く主体でない場合」に分けて考察している点で、これは本論で come と go、「行く」「来る」を考察する際に基準となっている。また、 E (共感度) が用いられるのは、「話し手が動く主体でない場合」であることにも注意しておきたい。本論では「話し手が動く主体である場合」のみを考察しているので、 E (共感度) の観点での考察は行っていない。

2. 2 英語の視点、日本語の視点

come と go、「来る」と「行く」について議論がなされる場合、「視点」について考察されることがある。まず、英語の come と go は、もともと話し手の視点をとる動詞であるとされていて、Radden & Dirven (2007) も、以下のように述べている (p.25) (斜字体原文のまま)。

The motion verbs *come* and *go* as well as *bring* and *take* inherently adopt the speaker's viewpoint and designate motion towards or away from the speaker, respectively.

高野 (2011) も、「*come* と *go* を、視点を中心に考えた場合、『基本的には話し手の視点に立って判定される移動行為』」と述べている (pp.28-29)。

一方、日本語の「行く」と「来る」に関してであるが、日本語でも話し手の視点に立って判定される移動行為であるとされている (小泉編, 2001)。

日本語の場合、話し手の視点から聞き手の視点に移動して「来る」という表現が可能な場合があるが、これは「動作主が話し手ではない場合」と森田 (2002) は次の例を使って説明をしている。

「A さんの車が今あなたのお宅へ向かって行った」

「A さんの車がもうすぐあなたのお宅へ来ますよ」

最初の日本語は、話者の視点から A 氏の移動を「向かって行く」ととらえているものであるが、下の日本語は動作主 (A さん) が話し手ではないから可能であるとされていて、「日本語の基本は『己の認識』すなわち『話し手』である」 (p.234) としている。

中澤 (2002) も、日本語は「話し手」が視点の中心であることを論じている。中澤 (2002) は、動作主が「行く」「来る」の選択に関与していることに言及し、動作主が話し手の場合は、聞き手の位置は「来る」の到達点にはならないため、日本語では話し手が動作主の場合の聞き手への移動は通常「行く」が用いられると述べている。「話し手を差し置いて聞き手中心の表現をとることはできない」 (p.293) ことから、日本語は「話し手」が視点の中心であるとしている。

以上、英語の視点も「話し手」、日本語の視点も「話し手」ということを見てきたが、英語の場合は、話し手は、視点を切り替えて聞き手の視点に合わせる、すなわち「話し手が聞き手の視点をとる」ことができる。

次の例を見て頂きたい。“I'll come and pick you up in the car if you like.” (CALD) は、英語では *come* であるが、この文を日本語に直すと、「よかったら、あなたを車で迎えに行こうか」と「行く」となり、*come* は「行く」と対応している。話し手が動作主で聞き手への移動を表現する時、英語では *come* が選択され、話し手が聞き手の視点をとっているが、日本語は「行く」となり話し手の視点のままである。

“I'm coming, Mom.” に関して、動作の主体で話し手である “I” が聞き手 (お母さん) に視点を切り替えている、と「視点の移行」の観点から説明ができる。この視点のシフトに関して、Radden & Dirven (2007) は、“the effect of sounding sympathetic and polite” (p.25) と述べ、Levinson (1983) も、“a polite deictic shift to the addressee's point of view” (p.83) と述べていることから、視点のシフトは、「共感」「礼儀正しさ」「丁寧さ」「敬意」などと関連付けられそうである。実際、中澤 (2002) は、「話し手に向かう移動動作を “*come*” で表現するが、話し手のかわりに聞き手の位置を “*come*” の到達点とみなすことで、聞き手本位、つまり聞き手に対する敬意表現としての “*come*” が許容されることになる」 (p.289) と解説している。

小島 (1984) も、*May I come to your house tomorrow?* (明日あなたの家に行ってもよいですか) という例を使い、英語では視点を聞き手の方に置き、日本語では話し手に視点があることを論じ、「英語ではそのようにすることによって相手に対する敬意を表すのである」 (p.155) と述べている。

小西 (1980) も、“I'm coming to Osaka next week.” という例を使い、相手が大阪にいる場合には、「*come* は相手に中心を置くという点で一種の敬語的な表現」 (pp.264-265) としている。

以上、英語においては、動作主が話し手で聞き手に向かう場合は *come* が使われることからわかるように、「聞き手」の方に視点のシフトが起こる。視点のシフトにより、聞き手が本位となり、このことから、動作主である話し手が聞き手に向かっていく動作 *come* には聞き手に対する敬意が含まれることがあると見なされている。

ただ、ここで注意しておきたいことは、「*come* には聞き手に対する敬意が含まれている」と言った場合の「敬意」についてである。日本語の敬語表現は、実世界における相対的な力関係に基づくものであると考えられるが、*come* にはそういった相対的な力関係は含まれていない。従って、*come* に関して「敬語表現」と述べる場合は、中澤 (2002) も指摘するように「日本語における敬語表現とは性質を異にする」 (p.289) ということを確認しておきたい。

2. 3 come と「行く」について

以上の議論をもとに、“I’m coming, Mom.”（「今行くよ、母さん」）について再度考察してみる。

まず、上記の移動行為は、久野（1978）の「話し手が動く主体である場合」と「話し手が動く主体でない場合」の区別の、「話し手が動く主体である場合」になっていて、come と「行く」が使われる基準となっている。

次に、大江（1975）の条件を当てはめると、“I’m coming, Mom.”（「今行くよ、母さん」）は、「伝達時に聞き手が到達点にいる」という come の成立の条件に合致するため come が使われていると言える。これに対し、話し手は、伝達時にはその時点の発話の場において、これから動作を行うところなので、到達時にもなっておらず、大江の「伝達時にも到達時にも話し手が到達点に位置していないと考えられている」という「行く」の条件が当てはまり、「今行くよ、母さん」と「行く」が選択されていると言える。

また、come が使われていることは、英語では、視点が聞き手の視点に移行しているため、という説明もつき、come が使われていることによって、視点の人（聞き手）に「敬意」「親しみ」を表している、と説明ができる。

“I’m coming, Mom.”という表現が、「聞き手（この場合お母さん）」に対する「敬意」まで含意しているかどうかであるが、「敬意」というより「親しみ」や「親近感」という表現の方がより近いかもしれないと言える。

『ウィズダム英和辞典第3版』（井上・赤野編, 2013）の come の説明の箇所には、「go が話し手・聞き手の視点から離れていくことを表すため、否定的態度や疎外感を暗示することが多いのに対し、come は逆に話し手・聞き手の視点に近づいていくことを表すため肯定的態度や親近感を暗示することが多い」という記載があるが、これは、「視点の移行による親近感」だと考えられる。

また、『コンパスローズ英和辞典』（赤須編, 2018）の come の説明の箇所にも、「視点の人・場所に親しみや敬意を持っていることが多い」という記載があり、「親しみ」や「親近感」という概念でも“I’m coming, Mom.”の come は説明できるのではないかと考えられる。

3. 「来る」の方言的用法の先行研究

ここで、「来る」の方言的用法に関する先行研究 6 本を概観してみたい。各研究論文において、「来る」を「来ル」、「行く」を「行ク」と表記したり、方言の表記にカタカナを使ったりしているが、原文のままの表記を使っている。また、今まで「日本語」としていたものが、方言との区別をするため、「日本語共通語」「東京方言的共通語」「日本語東京方言」などと表現されているが、これらも、原文のままの表現を使っている。また、「肥筑方言」という方言の区別が見られるが、これは、日本語の方言を、大きく本土方言と琉球方言に分け、本土方言を、さらに東部方言、西部方言、九州方言の 3 つに分類し、さらに九州方言を肥筑方言・豊日方言・薩隅方言の 3 つに分けた東条の分類に基づくものである（益岡編著, 2011）。

3. 1 『九州方言の基礎的研究』（1969）における「来る」の研究

九州方言学会は、九州全域にわたって 170 地点を選定し、老年層と少年層の二層に対して方言の使用についての調査を行っている。老年層は、60～75 才の男性 1 名、少年層は、中学校三年生在学中の 1 名としていて、両層とも、生粋の土地人またはそれに準じる人であることを条件としている。調査結果は『九州方言の基礎的研究』（1969）にまとめられている。県ごとのまとめとして、以下のような記載がある。

福岡県 「オ前ゲサン来ルケンナ」と、クルをイクの意に用いることが筑後と筑前西部に行われる。これは対者に自己の動作を言う時に限られるので、相手を主体に据えた一種の敬意表現かと思われる。

佐賀県 「来ル」を「行く」の意で用いる特殊用法がある。

長崎県 「行く」の代りに「来る」を使うのは県下に広く分布する言い方である。

熊本県 「今晚ヌシガエ来ルケン待ツトレゾ」のような特殊用法がひろく分布している。

鹿児島県 全域使用、なかなか直せない用法。話し手が聞き手のところへ移動する場合なので相手中心の表現。

宮崎県 大分県に近い地域では、「来る」を「行く」意味には使わないが、その他では大体使う。

大分県 該当事項なし。

以上のことをまとめて、このような「来る」の特殊な使い方は、『九州方言の基礎的研究』によると、筑前西、肥後、日向を結ぶ地帯以南に分布し、老・少二層ともほぼ同様の分布を示しているとしている。また、この現象は「敬意表現かと思われる」としている。

3. 2 大里 (1983) の「来る」の研究

大里 (1983) は、九州地方には、話し手の現在位置からの移動を表すのに、「今から君の家に行くよ」というところを「今カラオマエンゲ来ルゾ」と言う方言が広く分布していることに着目し、7名の発話の調査・分析を行っている。東京方言の共通語では視点の中心があくまで話し手の現在位置に固定されているのに対し、九州方言では中心が移動しうることを述べ、英語の come と類似していることを指摘している。また、調査対象者は、この「来る」の特殊用法については、「方言意識はないようである」と述べている。

3. 3 陣内 (1996) の「来る」の研究

陣内 (1996) は、九州のかなりの部分に「来る」の方言用法（以下「方言用法」）と呼ばれるものが存在していることに着目して研究を行っている。具体的には、日本語共通語で通常「行く」が用いられる文脈で「来る」が使われる現象に対してで、例えば、「これからうちに遊びに来ない？」という友人の電話での誘いに対して、「うん、じゃすぐ来る」と応じるような場合を典型例として考察している。

3つの場面を設定して、福岡市を中心とする肥筑方言圏出身の「方言用法」話者75名に対して、「自分でも使用する」、「自分は使用しないが自然である」、「不自然である」の3つの選択肢で回答して集計を行っている。最初に、話し手自身の移動行為が問題となる場合を挙げ、「話し手自身(A)の移動行為が問題となる場合」として次のような場面を想定して調査を行っている。

<場面> A, B はそれぞれ自宅に居り、電話で話している。

B: 今カラコッチニ来ン (来ない) ?

A: ウン、ジャスグ来ルケン (行くから)

これに対して、75名中、66名が「来ルケン」を使用、9名が「自分は使用しないが自然である」と回答

し、「不自然」と回答したものはいなかった、としている。陣内によると「このことは結局、久野 (1978) の日本語共通語についての指摘と同じく、「聞き手の感情移入がし易いほど「来ル」が出易い」ということを意味するものと思われる」(p.47) という考察を行っている。

また、「来ル」を使う場合の条件として、「Bの家が距離的に近く、到達するにもさほど時間を要しない」「Aが自分の家を出るまでの時間が短い」「AとBは親密な関係にあり、お互いに気配りなどする必要がない」「AはBより年長であり、Bに対し気配りをする必要がない」などを挙げ、肥筑方言圏出身の「方言用法」話者64名に、関連性の高いものを回答してもらったところ、89%の回答者が「親密な人間関係」が「来ル」の用法に関与している、としていて、この「来ル」の用法は「うち意識」をほぼ完全に獲得していることは明らかである」と述べている。また、「距離的な近さ」については73%、「時間的な近さ」については63%が関与していると回答している。この場合の「時間的な近さ」は、「発話時」と「指示時」の近さを述べるものである。また、回答者の中には、「ケン」(理由を表す「-から」)が続けば「来ルケン」が自然であるし、「-から」あるいは「-ますから」が組み合わさると「行くから」「行きますから」の方が自然だと具体例の回答もあったとのことである。

「方言用法」の「来ル」になるかならないかは、様々な文体的意味のレベルでの聞き手に対する「親近感」の多少が関わっていて、「問題の移動行為の到達点にどれくらい感情移入できるか」(p.49)ということであると論じている。

また、「来ル/行く」併用時には、一般に「行く」が改まりと遠慮を表すのに対し、「来ル」は親しさや遠慮のなさを表すと述べている。これには二つの異質な要因が作用していると論じている。一つは、方言と共通語の使い分け一般に見られる、「来ル」が仲間うちの気楽な場面で用いられるいわゆる「うち」のことばであるのに対し、「行く」が外来者ないし目上に対しての改まりを表す「よそ行き」のことばとして意識されることによるとする。もう一つは、「行く」と「来ル」それぞれが持っている概念的意味の違いから考察できるとしている。すなわち、「行く」が移動行為の起点、「来ル」が到達点に視点のある語であることか

ら、上記の場面設定のように、到達点から見てものを言う（「来る」を使う）ことは、「聞き手の側に立った丁寧な言い方にはならず、逆に自分の行為を相手に押しつける一種の図々しさが出て来ることになる」（p.52）と結論付けている。

3. 4 森口（1991）の「来る」の研究

九州方言の中の熊本方言にある、特に「来る」に注目して、次のような用例を提示し、分析を行い、その特異性を示し、共通語と比較し、その現象の分析を行っている。

「おい、はよ来。」（「おい、早く来い。」）
「今、来るけん、先食べとって。」（「今、行きますから先に食べていてください。」）

「今夜、あんたがえ来っけん、待とってね。」（「今夜、あなたの家に行きますから、待っていてください。」）

このような「来る」の特殊な使い方は、移動するということが含意されていて、その行動を行うということを確認し、到達点をはっきりしている場合に出て来る表現となっていると論じている。

しかしながら、森口が論じる「確約」という観点は、「今から来てよか？」と単に相手に質問する場合にも「来る」が使えることから違うのではないかと思える。

3. 5 西岡（2005）の「来る」の研究

現代ウィグル語の移動動詞の使い分けに関する研究であるが、英語・日本語東京方言・日本語福岡方言などとの対照も行っている。

あしたそっちに来る／行くけん。（あしたそちらに来る／行くから。）

の状況の場合、「行く」に加えて「来る」の使用が可能であるとする。「移動転移」という用語を使って、「移動動詞の選択に関わる発話地点から到達点への視点移動の容易さ」として、

英語＞日本語福岡表現＞日本語東京方言という位置づけを行っている。

3. 6 大城（2015）の「来る」の研究

「行く／来る」をどのような基準で使い分けしているのか聴き取り調査をもとに考察している。久野（1978）の、話し手が文中のどの人物の視点に立っているかを

「共感度」という概念で捉え、それが「行く／来る」を使い分ける基準となっているということをまず論じている。話し手が聞き手のもとへ向かう時に、東京方言では「そっちに行くね」と言うが、それでは肥筑方言で使う「そっちに来るね」が説明できないため、この両者を比較し、視点の捉え方にどのような相違点があるのかを明らかにしようと試みている。さらに、陣内（1996）が取り上げた肥筑方言の「来る」は、話し手と聞き手の親近感や距離・時間が「近い」場合に使われると論じていることに触れ、方言話者にとってどういう人間関係やどの程度の距離・時間が「近い」と捉えられているかを調査によって明らかにしようと試みている。

西岡は、久野（1978）の分析を使い、東京方言では動きの主体が話し手自身の場合には常に自分自身に視点を置き、発話場所が発発点の場合は「行く」、到達点の場合は「来る」となる、と述べている。一方、肥筑方言では、話し手が動きの主体であっても、到達点の聞き手の視点に立って「来る」を用いることができる、とする。しかし、聞き手との親疎関係を考慮し「来る」を使うことが失礼になる相手には「行く」を用いる、としている。自分が動く主体であっても到達点の視点に立つことができるという点が陣内（1996）の取り上げた肥筑方言の大きな特徴であると言うことができると論述している。

聞き取り調査は、「来る」を使用しやすくなる要因を調査するため、9名に対して行われている。9名は、佐賀県有田町出身か在住の人 6 名、佐世保市在住の人 1 人、福岡市出身の人 1 人、佐賀市出身の人 1 名である。

最初の質問は、「『これからそっちに来るね』の『これから』を『今すぐ』『30 分後』『今晚』『明日』『来週』『来月』『来年』『5 年後』『10 年後』『50 年後』に入れ替えた場合、『来る』を使えるか」という質問で、8 名が「明日」までを時間的に「近い」と判断し「来る」を使用すると回答しているため、肥筑方言話者の多くは「明日」までを時間的に「近い」と捉えているのではないかと推測している。しかし、時間的観点でどこからどこまでが「来る」を使用する範囲なのかは明確ではないとしている。

2 つ目の質問は、「『これからそっちに来るね』と言えるのは、目的地までどのくらいの距離の時ですか」

で、すべての回答者が物理的な移動の距離は関係がない、と回答。移動の距離が長くても話し手にとって馴染みのある場所への移動には「来る」を用い、移動の距離が短くても話し手にとっては親しみを感じない場所への移動には「行く」を用いることがわかった、としている。心理的に「近い」場所への移動は「来る」、そうでない場所には「行く」を使うという結果で、陣内（1996）とは異なる結果が出ている。

3つ目は、「『今からそっちに来るね』と言えるのは、聞き手がどの人物の場合ですか。また、その人物はあなたにとって『ウチ/ソト』どちらだと感じていますか」という質問で、「両親」「兄弟」「祖父母」「恋人」「親友」に対しては、回答者全員が「来る」を使用していることから、これらの人物は肥筑方言話者にとって近い相手と見なされていることがわかった、としている。ただ、「『来る』を使用する関係の人物を『ソト』と感じている回答者もいるので、人間関係の距離間と『ウチ/ソト意識』とは異なる」(p.49)と述べている。

質問の結果から、大城は、肥筑方言では、移動の主体が話し手であっても必ずしも話し手自身の視点に立つのではなく、聞き手との心理的あるいは時間的距離によって相手の視点に立った表現をするということがわかった、としている。「来る」を用いて相手に対する親しみを表していたり、「友人」の中でも相手との親しさの度合いに合わせて失礼のないように「行く」を用いるなど、「肥筑方言では視点による言語表現の使い分けが他者への配慮を示す手段となっていると言えるだろう」(p.50)と述べ、「言語表現における『視点』が他者への配慮を示す機能を持つ点は東京方言にはない肥筑方言の特徴であることがわかる」(p.50)と結論付けている。

4. 「来る」の方言用法に関するアンケート

4. 1 アンケートの実施

「来るけん」の実際の使用の状況を確認するために、陣内（1996）のアンケートの質問項目と同じものを質問項目として用意し、令和3年の9月20日から約1週間の期間で実施した。

アンケートは、Google フォームを使って、以下の内容で、150名の学生にアンケートを依頼し、111名の学生から回答を得た。回答者の内訳は1年生3名、

2年生40名、3年生63名、5年生4名で、男子学生は77名、女子学生は34名であった。

実施したアンケート

1. 次の場面を想定してください。A、Bはそれぞれ自宅にいて、電話で話をしている。

B: 今からこっちに来ん? A: じゃあ、すぐ来るけん。

このように相手の誘いに同意すると仮定した場合の場面で自分がAの立場になったとして、「来るけん」を、

- 使う
- 行くけんを使う
- 使わない、別の表現をつかう

2. 1で「来るけん」を使う、と回答した人は、相手が目上の人やそんなに親しくない人だったら、同じように「来ます」など、相手のもとに向かう「来る」が入った表現を使いますか?

- 使う
- 「行く」が入った表現を使う
- 使わない、別の表現をつかう

3. 設問1で「別の表現を使う」と回答した人は、その表現を教えてください。

4. 1のような場面で誘いがLINEなどで相手からメッセージ（書き言葉）で誘いが来た場合の返事はどうですか?

- 「来るけん」を使う
- 「来るから」「来るよ」などを使う
- 「行くけん」を使う
- 「行くから」「行くよ」などを使う
- 別の表現を使う

5. 4で別の表現を使う、と答えた人はその表現を教えてください。

6. 自宅住所（寮の人は実家住所）を市町村名で答えて下さい。現在の自宅住所（寮生は実家の住所）以外で、長崎県内や佐世保市内近辺以外の場所に長く住んだことがある人は、時期と場所を教えてください（「福岡市に9歳まで」など）。

アンケートにおける質問項目 1 については、陣内 (1996) の先行研究と同じ場面を設定して質問を行った。また、質問 4 において「1 のような場面で誘いが LINE などから相手からメッセージ (書き言葉) で誘いが来た場合の返事はどうですか?」という質問項目を入れたのは、簡単な事前の予備調査の段階で、「『来るけん』は電話などでは使うが、LINE での返事になると『行くけん』になる」という回答をする学生が複数いて、どれくらいの割合の学生が話し言葉と書き言葉で変えているのかを確認したかったためである。

4. 2 結果

質問 1 に関して、「『来るけん』を使う」と回答した学生は 39 名、「『行くけん』を使う」と回答した学生は 52 名、「使わない、別の表現をつかう」と回答した学生は 20 名であった。

質問 2 に関して、質問 1 で「『来るけん』を使う」と回答した 39 名のうち、「『来ます』など、相手のもとに向かう『来る』が入った表現を使う」と回答した学生は 15 名、「『行く』が入った表現を使う」と回答した学生は 24 名であった。

質問 4 に関して、質問 1 で「『来るけん』を使う」と回答した 39 名に絞って回答の内訳を確認してみると、「『来るけん』を使う」と回答した学生は 8 名、「『来るから』『来るよ』などを使う」と回答した学生は 9 名、「『行くけん』を使う」と回答した学生は 14 名、「『行くから』『行くよ』などを使う」と回答した学生は 8 名、「別の表現を使う」と回答した学生はいなかった。

質問 6 に関して、質問 1 で「『来るけん』を使う」と回答した学生 39 名の自宅住所は、佐世保市 17 名、長崎市 7 名、武雄市 3 名、唐津市 2 名、諫早市 1 名、大村市 1 名、雲仙市 1 名、平戸市 1 名、対馬市 1 名、川棚町 1 名、時津町 1 名、佐賀市 1 名、有田町 1 名、杵島郡 1 名であった。

一方、質問 1 で「『行くけん』を使う」と回答した 52 名の自宅住所は、佐世保市 26 名、長崎市 8 名、大村市 5 名、諫早市 2 名、唐津市 2 名、有田町 2 名、南島原市 1 名、平戸市 1 名、長与町 1 名、佐々町 1 名、佐賀市 1 名、嬉野市 1 名、伊万里市 1 名、であった。

4. 3 アンケートの結果に関する考察

質問 1 に関して、設定した場面で「来るけん」を使うと回答した学生は、全体の 35% ほどで、先行論文の中の陣内 (1996) や大城 (2015) の結果とはかなり異なる結果が出た。陣内 (1996) の調査の対象者は年齢が不明であるが、大城 (2015) の調査の対象者 9 名のうち 20 歳代が 7 名で 50 歳代が 2 名となっている。時代の変化や本論でのアンケートの対象者の年齢層の違いが影響している可能性がある。また、マスコミの影響や教育の影響、人の交流や都市化の影響なども原因として考えられる。この結果から「来る」の方言用法は、一定数の割合は使われているが、減ってきているのではないかと考えられる。一方で、アンケートの項目にはなかった項目ではあるが、「自分は『来るけん』ではなくて『行くけん』を使うが、人が『来るけん』使っているのを聞いても違和感はない」という意見もあったので、陣内 (1996) の研究と同じように、「自分は『来るけん』は使用しないが違和感はない」という項目を入れたら、もう少し違う傾向が窺えたかもしれない。

また、「行くけん」を使うと回答した学生は 47% ほどいることから、設定した場面で「行くけん」が入った用法を使う学生は半数近くいることもわかった。

質問 2 の「相手が目上の人やそんなに親しくない人だったら、同じように『来ます』など、相手のもとに向かう『来る』が入った表現を使いますか?」に関しては、質問 1 で「『来るけん』を使う」と回答した 39 名に絞って確認した。「『来ます』など、相手のもとに向かう『来る』が入った表現を使う」と回答した学生は 15 名、「『行く』が入った表現を使う」と回答した学生は 24 名であった。目上の人やそんなに親しくない人に対しては「『来ます』など、相手のもとに向かう『来る』が入った表現を使う」より「『行く』が入った表現を使う」傾向があることがわかった。陣内 (1996) や大城 (2015) の論と同じように、「改まった」関係には「行く」の方を使う傾向があると言えそうである。

質問 4 の「4. 1 のような場面で誘いが LINE などから相手からメッセージ (書き言葉) で誘いが来た場合の返事はどうですか?」についても、質問 1 で「『来るけん』を使う」と回答した 39 名に絞って確認した。「『来るけん』を使う」と回答した学生は 8 名、「『来

るから』『来るよ』などを使う」と回答した学生は9名、「『行くけん』を使う」と回答した学生は14名、「『行くから』『行くよ』などを使う」と回答した学生は8名、「『行くけん』を使う」や、「『行くから』『行くよ』などを使う」と回答した学生の方が多く、アンケートの結果から話し言葉と書き言葉(LINEで使う言葉)で使い方を変える場合があることがわかった。

質問6の自宅住所の回答から、佐世保市の中でも「来るけん」と使う学生と「行くけん」を使う学生が混在しており、また、他の出身地域を比較しても「来るけん」と使う学生と「行くけん」を使う学生が混在していた。どちらを使うかに関しては、地域による差異はなく、個人差のレベルだと考えられる。

4. 4 「来る」の方言用法に関する聞き取り調査

前述のアンケートは、若年層のみに絞った調査となっているため、人数は少ないが7名の年長者を対象に聞き取り調査を行った。7名は、長崎県北松浦郡佐々町と佐世保市世知原町に在住の60歳代と70歳代の7名で、佐世保高専の職員を通じて聞き取り調査を行ってもらった。聞き取り調査の内容はアンケートとほぼ同一である。

4. 5 聞き取り調査の結果

電話での相手の誘いに応じる場合は、全員が「『来るけん』を使う」と回答。次に、相手が目上の人やそんなに親しくない人には「行くけん」を使うと5名が回答。「相手が目上でも『来るけん』を使う」と2名が回答。誘いが来た場合に書き言葉での返事は、全員が「『行く』が入った表現を使う」と回答したとのことであった。最後の「書き言葉」に関する質問は、60歳代と70歳代の世代なので、若年層のLINEの言葉とは、「書き言葉」に関するイメージが違っていると考えられるが、「行く」が入った表現にシフトすることがわかった。

4. 6 聞き取り調査の結果の考察

聞き取り調査の結果、電話での相手の誘いに応じる場合は、全員が「『来るけん』を使う」と回答したことから、年齢が上がれば、「来るけん」を使う傾向が強くなると言える。相手が目上の人やそんなに親しく

ない人の場合は「行くけん」を使う傾向があることから、「改まった」関係には「行く」の方を使う傾向については、若年層と変わりがないようである。また、聞き取り調査の対象者が書き言葉では「行く」が入った表現に変えるということは、「書き言葉」に対しては「改まった」感覚で捉えられているということだと言える。

一方で、陣内(1996)が言うところの「うち意識」や他の地域の人との交流の度合いなどが「来るけん」の使用には関連性があるのではないかとすることも窺えた。聞き取りを行ってくれた職員によると、聞き取り調査を受けた年長者が住む地域は、「コミュニティは狭く、年齢は関係なく、近所でも家族のような深い関係」の場所とのことであった。医者や配達の人などに対しても気軽に話す傾向にあるとのこと、「まったくの他人行儀で話す場面があまりないように思える」とのことであった。「相手が目上でも『来るけん』を使う」と回答した2名は、「このあたりの人はみんな、目上の人に対しても使っているように感じる」という感想を述べていたとのことなので、「うち意識」が「来るけん」の使用に作用していると言えそうである。このようなことから、「来るけん」の使用については、「親近感」「うち意識」が関係していると考えられる。

5. 考察

アンケートの結果は、相手のところに行く「来る」の方言用法の「来るけん」を使う学生が予想より少なかったが、一定数の学生は使っていることがわかった。また、聞き取り調査の結果では、年齢が上がると「来るけん」を明らかに使うことがわかった。このようなことから、「来るけん」と“I'm coming.”とのメカニズムの類似点や相違について考察を行う意義はあると思える。

まずは、「視点移動の容易さ」の観点から考察してみる。「今からこっちに来ん？」という呼びかけに対し、「じゃあ、すぐ来るけん」の場合、話し手は、伝達時には現時点にいて、これから動作を行うところなので、到達時にもなっておらず、大江(1975)の「伝達時にも到達時にも話し手が到達点に位置していないと考えられている」という「行く」の条件が当てはまり、本来ならば「行く」が選択されるはずである。

中澤 (2002) の論じるように、「話し手を差し置いて聞き手中心の表現をとることはできない」 (p.293) ことや「動作主が話し手の場合は、聞き手の位置は『来る』の到達点にはならない」 (p.297) ため、話し手が動作主の場合の聞き手の移動は通常は「行く」が用いられるはずである。

ところが、本来なら「行くけん」を使うところ「来るけん」を使っているということは、英語の “I’m coming.” の場合と同じく、話し手が視点を切り替えて聞き手の視点に合わせる、すなわち「話し手が聞き手の視点をとる」という「視点の移行」現象が起きていると言える。これは、西岡 (2005) の述べる「移動動詞の選択に関わる発話地点から到達点への視点移動の容易さ」 (p.234) の観点からも説明できる。

以上のように、“I’m coming.” の come も「来るけん」も「視点移動の容易さ」の点では共通していると考えられる。

次に、「来るけん」の使用によって、視点のシフトが起こり、話者の視点の移行が他者への敬意を示しているかどうか、について考察をしてみたい。『九州方言の基礎的研究』 (1969) でも「来るケン」を使う現象について、「敬意表現かと思われる」と論じているが、本当に「敬意表現」と言えるであろうか。

come の場合は、話者の視点が聞き手に移動することにより、聞き手に対する「敬意」や「親しみ」「親近感」を含意することは、今までの議論で確認できている。また、Radden & Dirven (2007) は、“I’m coming to your graduation.” という英文を提示し、come が使われる理由は、話し手が聞き手の視点をとるから (the speaker takes the hearer’s viewpoint) と説明し、自分以外の立場に自分を置くことによって、“we mainly do so because this has the effect of sounding sympathetic and polite” と論じている。

“polite” に関しては、「相手に対する礼儀正しさ、丁寧さ」と訳せるため、come には「相手に対する礼儀正しさ、丁寧さ」も含意される場合があると言える。

一方、「来るけん」の場合を考察すると、相手が目上の場合などは「行くけん」を使う傾向が強いということがわかっている。「来るけん」を使うことによって聞き手への「敬意」は含意されていないと言える。

従って、come が含意する「敬意」については、「来るけん」には含意されておらず、この点に関しては、

come と「来るけん」は違っているということになる。

では、「来るけん」の使用によって、視点のシフトが起こるが、その視点のシフトによって、何が起きているのであろうか。それは、聞き手に対する「敬意」ではなく、聞き手に対する「親近感」や、陣内 (1996) が言うところの「感情移入」や「うち意識」が含意されているのではないかと考えられる。ただ、「来るけん」が含意する「うち意識」については、聞き取り調査の結果にもあったように、背景にあるコミュニティの文化が「来るけん」の使用に関わっていると思われる。加えて、come に関しては、「うち意識」の論点で論じたものは見受けられないことから、「うち意識」の論点から come と「来るけん」との比較考察は行わず「感情移入」の観点で come と「来るけん」について考察を行ってみたいと思う。

先ほど述べた Radden & Dirven (2007) の “we mainly do so because this has the effect of sounding sympathetic and polite” であるが、“polite” の前にある “sympathetic” については、久野 (1978) の言うところの “empathy” (共感度) と通じるものがある。しかし、久野 (1978) の “empathy” (共感度) は、「話し手が動く主体でない場合」にはじめて導入できる尺度であって、“I’m coming.” や「来るけん」のような「話し手が動く主体である場合」の考察には使えない。

この “sympathetic” については、「感情移入」と訳すことも可能である。陣内 (1996) は「感情移入」の観点を使い、「聞き手の感情移入がし易いほど『来ル』が出易い」 (p.47) と述べ、「問題の移動行為の到達点にどれくらい感情移入できるかているか」が「来るけん」を使うかどうかの基準であると論じているが、Radden & Dirven (2007) の使う come に関しての “sympathetic” という観点をを使うと陣内 (1996) の論も説明できると考えられる。すなわち、Radden & Dirven (2007) の論に基づけば、come と「来るけん」については、視点が聞き手に移動することにより「感情移入」が起こっていると言えるのではないか。この「感情移入」の観点では、come と「来るけん」は類似していると言っても良いのではないかと思える。

以上のことをまとめると、come と「来るけん」の類似点と相違点を「視点の移行現象」を基に考察を行ったが、大前提は「話し手が動く主体である場合」である。その上で考察をしていくと、まず、方言用法の

「来るけん」は、通常の日本語では「行く」を使う場面で聞き手の視点をとっているという点で、英語の *come* に類似している、「視点の移行現象」が起こっていると考えられる。しかし、「来るけん」には、視点の移行による *come* のような「相手に対する敬意」までは含意されておらず、この点は、英語の *come* とは異なっていると言える。では、「視点の移行現象」によって「来るけん」が含意するものは何かと言うと、それは、「親近感」や「感情移入」ではないかと考えられる。この「親近感」や「感情移入」の観点では「来るけん」と *come* は類似しているのではないかと思われる。

6. 最後に

本論は、令和4年度から新3年生に対して始まる「グローバル・リテラシー」の講座のための題材探しが出発点であった。地域の視点とグローバルの視点の両方を取り入れた題材がないか探す中で、“*I'm coming.*”と「来るけん」に類似性があるのでは、と着目した。英語では、相手のところに行くのに“*I'm going.*”ではなくて“*I'm coming.*”を使うのに対し、標準的な日本語では「今行くから」と「行く」を使う。それに対して、九州の中でも肥筑方言と言われる方言用法では、「来るけん」と「来る」を使うことがわかっていて、佐世保地区でもこの「来るけん」の用法は存在することは経験的に認識できていた。

そのような経緯でこの「来るけん」と“*I'm coming.*”の背景にあるメカニズムを解明できないかと考えたのがきっかけであった。文献を調査していくと、英語の *come* と *go*、日本語の「来る」と「行く」に関しては、多くの著名な言語学者によって長年にわたって非常に深く論考がなされていることがわかった。また、「来る」の方言用法についても、40年ほど前から着目されて調査や研究がなされていることもわかった。

しかし、「来るけん」の方言用法に関する調査データは古かったり、論考も古い面もあり、現在の実態と合っていない面もあるのではないかと考え、佐世保高専の学生に対してアンケートを実施してみた。その結果、若年層の間では、この「来るけん」の使用はかなり減ってきていることがわかったが、実際にはまだ使われていることがわかった。また、補足的に聞き取り調査も行ったところ、年齢層が上がると「来るけん」

の使用頻度はかなり上がるということもわかった。

英語の *come* と *go*、日本語の『来る』と『行く』については、いろいろな観点で論じられているが、本論では、「来るけん」と“*I'm coming.*”の背景にあるメカニズムについて、いくつかの理論をもとに考察を行ってみた。本論で考察したことをもとに、令和4年度の「グローバル・リテラシー」の講座の中でさらに展開して行ければと考えている。

参考文献

- 赤須 薫 (編) (2018). 『コンパスローズ英和辞典』 研究社.
- Cambridge Advanced Learner's Dictionary (CALD)* (2008). Cambridge University Press.
- Fillmore, Charles J. (1972). “How to know whether you're coming or going.” *Descriptive and Applied Linguistics*. V, International Christian University, pp.3-17.
- 陣内正敬 (1996). 『北部九州における方言新語研究』 九州大学出版会.
- 小泉 保 (編) (2001). 『入門語用論研究—理論と応用—』 研究社.
- 小島義郎 (1984). 『英語辞書学入門』 三省堂.
- 小西友七 (編) (1980). 『英語基本動詞辞典』 研究社.
- 小西友七 (2016). 『英語のしくみがわかる基本動詞 24』 研究社.
- 久野 暉 (1978). 『談話の文法』 大修館書店.
- 九州方言学会 (1969). 『九州方言の基礎的研究』 風間書房.
- 井上永幸・赤野一郎 (編) (2013) 『ウィズダム英和辞典第3版』 三省堂.
- Levinson, Stephen C. (1983). *Pragmatics*, Cambridge University Press.
- 益岡隆志 (編著) (2011). 『はじめて学ぶ日本語学—ことばの奥深さを知る 15章—』 ミネルヴァ書房.
- 森田良行 (2002). 『日本語文法の発想』 ひつじ書房.
- 森口恒一 (1991). 「日本語におけるある種の方向性動詞の方言的差異の一考察」『横浜国立大学人文紀要 第二類, 語学・文学』 第38巻, pp.1-8.
- 中澤恒子 (2002). 「『来る』と『行く』の到着するところ」生越直樹編『対照言語学』 東京大学出版会, pp.281-304.

- 西岡いずみ (2005). 「現代ウィグル語移動動詞の対照言語学的研究—英語・日本語東京方言・日本語福岡方言・シベ満洲語との対照を通して—」『九州大学言語学論集』 25/26, pp.214-238.
- 大江三郎 (1975). 『日英語の比較研究—主観性をめぐって—』 南雲堂.
- 大里泰弘 (1983). 「九州方言における『来る』について」『九州大学言語学研究室報告』第 4 号, pp.39-42.
- 大城玲奈 (2015) 「視点と言語表現—移動動詞『行く/来る』の使い分けについて—」『東京女子大学言語文化研究』 23, pp.36-51.
- Radden, G. and R. Dirven (2007). *Cognitive English Grammar*, John Benjamins.
- 高野恵美子 (2011). 「日英移動動詞 COME と GO の対照研究: 認知言語学の視点から」『学苑・英語コミュニケーション紀要』 No.846, pp.28-39.
- 田中茂範・武田修一・川出才紀 (編) (2003). 『E ゲイト英和辞典』 ベネッセ.
- 森口恒一 (1991). 「日本語におけるある種の方向性動詞の方言的差異の一考察」『横浜国立大学人文紀要 第二類, 語学・文学』 第 38 巻, pp.1-8.